

日誌研究における省察の多層性

岡本 依子（湘北短期大学）

今日の私の役割は、歴史の証人になることであり、それがきつと継承ということなのだと思います。ただ聞いているだけではなく、この場でいかにいいことを言うかでもなく、ここで自分が何かを学んぶことの方が大事なのかなと思っていますので。

少し軽く自己紹介をさせていただきますと、私は胎動日記の分析をしたことがあります。妊婦の方に胎動についていろいろ書いていただいたものを分析したものです（e.g. 岡本・菅野・根ヶ山, 2003）。また、一方で、発達心理学者らしく自分の子どもの記録を私なりにせっせせっせとってはいますが、ただこの記録というのはただせっせとっているわりには時間がなくて、あまり効果的に活用できておりません。麻生先生がノート（日誌）をお持ちだったのをチラッと見せていただいたりすると、びっしりと細かく、何歳何カ月（大きくなった子どもの月齢）まで書かれた詳細な記録があったのですが、私なんかはそうはいかずに、保育園のお便り帳を利用して、保育園の先生に嫌がられるくらいの量まで書くぞというものを書いております。それを実際には分析するところまでいかず、せいぜいやったのは、最近の学生には、いきなり理論だけを言ってもわからないので、テキスト（授業用教材）をつくる時に、ひたすら実際にあったことを載せていったという作業をしています。それが、パワーポイントで示した我が子の日記を用いた既存理論の解説にあたります（e.g. 岡本・菅野・塚田, 2004）。私のやっていることは、まだまだこれからというところです。

私はあえてここでは「日記」という言葉を使っています（資料1）。今日のテーマになっている研究会の名前は日誌研究会ですし、先生方も日誌と使

日記と日誌

- ・ 日記：日々の出来事や感想などの記録。日誌より私的・個人的。
- ・ 日誌：団体・組織の中で、毎日の出来事や行動などをした記録。

日記 ←—————▶ 日誌

- ・ はじめから研究の舞台に載せる予定のもの
 - 「ただの日記」にならないために
 - 日誌に「日記視点」が入る強みと弱み

資料1 日記と日誌

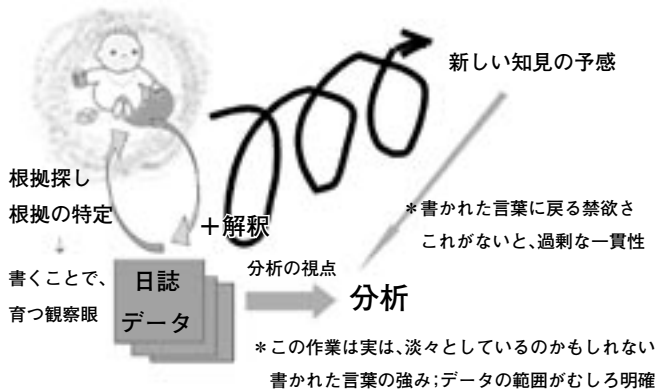
われていました。日誌と日記はどう違うのかと思って辞書で調べてみると「日記」と「日誌」は多少温度差がありました。日記というのは日誌より私的・個人的なもの。日誌というのは団体組織の中で記した記録。つまり、必ず誰かの目に触れさせる前提のもとに残された記録を日誌だということがわかりました。そして、先生方のものは確かに日誌であり、私が分析したものも実際には妊婦のお母さん方がひたすら書いた日記、ただ感性で書いたものに少し理屈をあてがったもので、日記と日誌は違うものだということに気がつきました。気がついた時に、だからと言って日誌と日記というものを二分できるものではないということも感じました。おそらく話題提供の先生方から出ていた「当事者性」ともかかわると思いますが、日記の方は、より当事者的です。一方、日誌も書くという作業がある以上、当事者から逃れることはできないと思いますが、それでも当事者でないという視点を意識しているのかなと。そのような時、ただの日記にならないためにはどうしたらいいか。日誌に日記の視点が入ることの強みと弱みはどんなことだろうかと、これから考えていきたいなと思いました。その点について、アドバイスいただけた

らとも思いました。

書かれた言葉に載せるということは、一種の相当な加工の作業がすでに始まっているのだということで、こんな図式を螺旋で書いてみましたが（資料2）、まず目の前に起こっている何かのできごとや現象から、ある輪郭を持った一部を抜き出して日誌にします。その時に日誌の強みは解釈といっているのか、場合によっては直観と言ってしまうでもいいと思うのですが、「関係の中で生成された意味」というものを確実に含み込むことができます。そればかりになってしまったら日記になってしまうのかなと思いますが、とにかく、含み込むことができます。ところが、先生方の日誌研究を拝見すると、そのまま書いたものだけで分析しているわけではないように感じたのです。その方法の部分が見えなくて、私たちがこれから後、追いかけて研究を進めていこうとする時に知りたい部分ですが、書かれた日誌を即、扱っていくのではなく、根拠探し、根拠の特定、「この意味はどこから発生したと思えるのだろうか？」というような反芻^{はんすう}、省察というプロセスがあるんじゃないか。それはいかにも一人で行っているように見えて、麻生先生のご発表では「過去の自分が今の自分と共同作業する」という話や、あるいは日誌研究会という場で第三者を入れていくという話、秦野先生のご発表では、実際には療育にかかわる第三者を入れていくということで解釈が意味を持ってくる、共有できるような形になっていく、形になっていって、それが即「はい、結果ですよ」となっていくのではなく、別の場面、別の時間を共有することも、日誌を書いている人にはできるのだと感じました。ずっと長くつきあっているというのは、そういうことだと思うんですが。

そのような省察というプロセスの後、それですぐ、結果に行くかということ、そうでもなく、ここで私は研究として成り立たせるコツがあるのではないかと思います。書かれた日誌に戻る禁欲さ、先程、根拠探しをしていく時に、麻生先生が「面白いものを発見した、発見したんだけど、いつからだろう」と遡っていく。書かれたものをどうしていくかというような、書かれた言葉はそもそも制約があり、そのため作業はすごく淡々としたものに落ちていくのではないかと思います。つまり、書かれた日誌に戻るといことが、

省察としての分析



資料2 省察としての分析

非常に制約を持たせることであるのですが、そのせいで、データの範囲が明確になるような強みもあるのではないかと感じたりしました。

今回は「書かれた言葉に戻る」という意味では研究のプロセスとしてもぐるぐる回っているのかなと感じたりしました。

〈参考文献〉

- ・岡本依子・菅野幸恵・根ヶ山光一 2003 胎動に対する語りにみられる主観的な母子関係 発達心理学研究, 14, 64-76.
- ・岡本依子・菅野幸恵・塚田-城みちる 2004 エピソードに学ぶ乳幼児の発達心理学—関係のなかでそだつ子どもたち 新曜社